

近代トルコにおける軍人のエトス

小松香織

I. 序論

筆者は現在「軍事史的観点からみた18～19世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究」というテーマの科研プロジェクトに参加している。当該研究の目的として掲げられているのは、「人は自己の名誉のため、あるいは他者への忠誠のため、あるいは愛国心から、戦場で自らの生命を犠牲にする。戦いにおいて、命より大切なものとは何かは、地域・時代・社会構造・宗教・国家・民族などによって異なる。軍事的エトスは、軍事技術の進歩、軍事編成や徴募方法、軍事教育や訓練、軍事学と思想、民族的・宗教的アイデンティティとともに、身分・社会・国家の性格と深く関係している。このような諸要素がどのように結びつき、その結果軍事的エトスはいかに変化していくのかを検討する」というものである。研究分担者としての筆者に与えられた役割は、専門領域であるオスマン帝国近代の事例を明らかにすることである。そこで、「オスマン帝国軍人の名誉・忠誠・愛国心」について若干の考察を試みた。

オスマン帝国においては、カルロヴィッツ条約締結（1699）以後、西洋モデルを取り入れた改革が始まるが、その中心となったのが軍事の分野であった。お雇い外国人による西欧軍事技術の導入がはかられ、14世紀以来軍事組織の中核を担ってきたイエニチェリ（君主直属の奴隷軍人）軍団は解体されて西洋式の軍団に再編されていく。その過程において徴兵制が採用された。西欧と同じく一般市民が兵士として近代的な大規模軍団に組み込まれていったのである。こうした変化にともない、オスマン軍人の「エトス」もまた変容していったはずである。

軍人のエトスとは何か。まず「何（誰）のために戦うのか」について考えてみたい。オスマン軍人の場合、1. 信仰＝イスラーム（神）、2. 君主＝スルタン（オスマン朝）、3. 祖国（同胞）の3つをあげることができる。前近代においては1と2であり、19世紀末以後3が現れる。2と3はある意味建前とも言えるが、1は個人の心性に深く関わる問題である。

前近代におけるオスマン軍人のエトスはイスラーム信仰にもとづくものであった。戦いはガザー、ジハード（聖戦）であり、ガーズィ（信仰英雄）、シェヒト（殉教者）となることが「名誉」とされた。戦いの目的はあくまでも「信仰のため」であり、必ずしも国のためではない。三橋によれば、イエニチェリの詩人たちが好んで詠んだ題材は、指揮官や隊長への賞賛、戦没勇士への追憶、アッラーの恩寵や祝福への祈りなどである⁽¹⁾。ここに彼らの軍人エトスを読み取ることができる。軍務登録の勅令にも「イエニチェリ軍団すべての存立と再生はガザーとジハードのため」⁽²⁾との文言が見られる。

ただしイエニチェリの場合カプクル（スルタンの奴隷）としての立場から、その「忠誠」は神と共にスルタンにもあったであろう。「何（誰）のために戦うのか」についてさらに掘り下げるならば、理念とは別に、もっと現実的な対象、すなわち部族・部隊、土地、戦利品のようなもろもろの利益などのためであったことも確かである。

こうした前近代におけるオスマン軍人のエトスは近代に入ると徐々に変化していく。ベルケスは、「チューリップ時代⁽³⁾の支配エリート層は、信仰とガザーの入り混じった『古いオスマンのエトス』とは切り離され、オスマンの『アサビーヤ』⁽⁴⁾の火は消えてしまった」⁽⁵⁾という。軍人に限らずオスマン人のエトスたる「アサビーヤ」が消滅した要因として近代思想の影響があげられる。フランス革命後に西欧から入ってきた「祖国」、「愛国心」、「民族」といった概念は、オスマン帝国のエリート軍人にアイデンティティの動揺をもたらした。それまでオスマン帝国の人々のアイデンティティの所在は宗教に依拠するものであった。自分は何者かと問われたならば、「ムスリムか否か」が何よりも重要なこととされた。「名誉」・「忠誠」も神に対してのものだったのである。しかし、近代以降「名誉」・「忠誠」の対象として「祖国」が、さらに後には「民族」が建前として掲げられるようになる。

民衆にとっても同じことが言えた。アイデンティティは「ムスリム」か「キリスト教徒」か「ユダヤ教徒」かに存した。それ故、タンジマートの勅令（1839）で、全国民の法の下での平等が宣言された後、支配エリートたちは、民衆の「国民」としてのアイデンティティの創造に努力しなければならなかった⁽⁶⁾。軍隊においても徴兵制が採用され、国民動員のために上からの軍事エトスとしての「愛国」、「忠誠」が語られ始める⁽⁷⁾。

近代における「オスマン帝国軍人の名誉・忠誠・愛国心」について考察する時、このアイデンティティの問題は非常に重要なファクターとなる。また、オスマン帝国からトルコ共和国へという歴史の流れの中で軍人のエトスはどのように変化したかも興味深い課題である。本稿では、これらの問題関心から一人のオスマン軍人に焦点をあてる。その人物とは日露戦争の観戦武官であったベルテヴ・パシャである。

II. 日露戦争観戦武官ベルテヴ・パシャの日本人論

ベルテヴ・パシャ（デミルハン）（1871-1964）は1871年オスマン帝国の都イスタンブルに生まれた。陸軍士官学校卒業後1894年にドイツに留学し、コルマル・フォン・デア・ゴルツのもとで学んだ。1904年日露戦争の観戦武官として旅順、奉天の戦いを観察し、自身戦場で負傷するも、帰国後その報告書ともいえる『日露戦争の物質的・精神的教訓と日本人の勝利の原因』（*Pertev Paşa, Rus-Japón Harbinden alınan Maddî, Manevî Dersler ve Japónların Esbab-ı Muzafferiyetleri*, İstanbul, 1913）（以下『教訓』と略す）を著した。その後陸軍参謀長、司令官などの重職を歴任した。トルコ共和国以後は国会議員となり政治家としても活躍した。文筆活動としては、日本滞在記を含む『わが生涯の思い出 日露戦争1904-1905』（*Hayatımın Hatıraları, Rus-Japón Harbi 1904-1905*, 1943）（以下『回想』）、『日本人の実力—日本はなぜ、いかに発展したか』（*Japónların Asıl Kuvveti—Japónlar Niçin ve Nasıl*

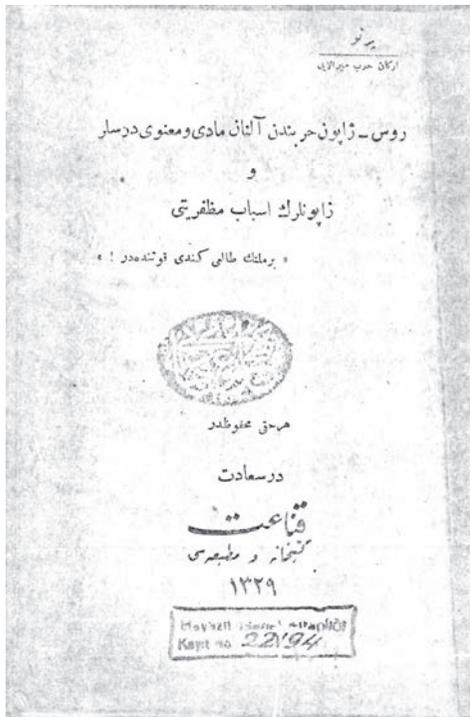


写真1 ペルテヴ・パシャ『日露戦争の物質的・精神的教訓と日本人の勝利の原因』

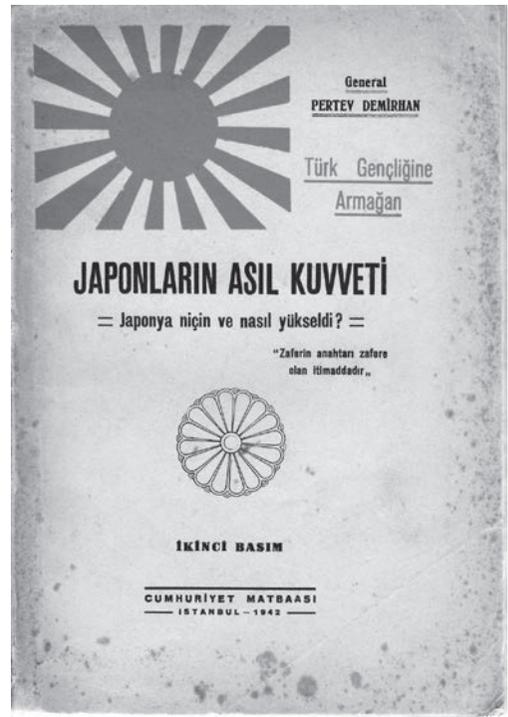


写真2 ペルテヴ・デミルハン『日本人の実力—日本はなぜ、いかに発展したか』

Yükseldi, 1937, 2.ed., 1942) (以下『実力』) など日本関係の著作を残しており、20世紀前半におけるトルコ有数の日本通であったといえよう。

ペルテヴ・パシャに関しては、これまで中東・トルコにおける「日本人観」の視点から、主に日本研究者や国際関係論の専門家が取り上げてきた。代表的なものにデュングル 2012 や横井敏英 2008 といった専論がある。前者は主に『教訓』を後者は『回想』を取り上げているが、いずれも主たる問題関心は日土（オスマン帝国）関係史とトルコ人の日本人観にある。本稿との関係で最も注目すべき研究はウォリンガー 2014 『オスマン人の日本観』である。同書は主に青年トルコ人政権において、日本モデルが近代化にいかなる役割を果たしたのかを、浩瀚な史料を用いて論じている。その中で、著者はオスマン軍人の著作で日本がどのように書かれているかを、豊富な事例で紹介しているが、最も多く引用しているのがペルテヴの『教訓』である。ペルテヴがこの著作において、日本軍人の忠誠、名誉、愛国心、自己犠牲、責任感、将校と兵士との親愛を称賛し、それらが「武士道」や儒教精神に依拠していること、教育を重視し国民皆兵に成功したことを強調し、オスマン帝国もこれに学ぶべきであると考えていたと述べている。ウォリンガーはペルテヴらの言説を通じて日本モデルの重要性を明らかにしている。本稿では、ペルテヴを当時のオスマン軍人の典型として一般化せず、彼個人のエトスに重点を置きたい。

本章ではベルテヴの上記日本関係三部作のうちオスマン帝国期に書かれた日露戦争の体験にもとづく代表作『教訓』を中心に、彼の日本人論とそこに見出される軍事的エトスを探っていく。同書の構成は、序文（3-6頁）、物質的教訓（6-80頁）、精神的教訓（81-140頁）の3章立てとなっている。観戦武官の立場から、まず物質的教訓として日露戦争における戦術や新兵器について述べ、その後に精神的教訓として日本民族の優秀性を称えている。ここでは、精神的教訓の部分を取り上げるが、ベルテヴの日本人論をできるだけ彼自身の言葉＝「語り」を引用しながら分析していきたい⁽⁸⁾。

(1) 日本人の美德

ベルテヴの日本人論は、以下のように要約することができる。

- 死を恐れない勇敢な民族である
- 愛国心と自己犠牲の精神に満ちている
- もの静かで我慢強い。
- 名誉を重んじる。
- 武士道精神が生活に根を下ろしている
- 民族の道徳を守ることを何よりも重視している
- 教育に熱心である

まず日本人の性格、美德として、死を恐れない勇敢さ、温厚さ、謙虚さ、もの静かな我慢強さということが強調される。「温厚さと謙虚さ、その中でもの静かな威厳。日本民族全体の最大の長所の一つである」(a-87)とし、その理由に、「日本人は幼少時より『紳士たるもの常に温和であれ、自分を誇示することは慎め、決して忍耐を失うな、常に冷静さを保て、大声で話すな』と言われつつ育てられる。」(a-85)ことがあげられる。このためヨーロッパ人は日露戦争まで日本人の兵士としての優秀さに気づけなかったというのである。

ベルテヴはこれらの美德をイスラームにひきつけて、「日本人の行動は常に『言葉のおだやかなものには尊敬と服従が自らついてくる』というハディース〔預言者の教え〕の実践であった」(a-85)という。このようにイスラームと日本人との共通点はたびたび指摘される。「日本人の願いとは？それは祖国を何よりも神聖なものとし、国のためによるこんで命を投げ出すことである」(a-3)とし、これはジハードに通ずるものであるという。「イスラームで『ジハード』による『ガーズィ』、『シャハーデット〔殉教＝戦死〕』が兵にどれほど大きな精神的支えとなるかを我々は知っている。まさにこれと同様に、日本人の上に儒教の道徳律は非常に重要な心理的影響を及ぼしている」(a-81)のである。

(2) 将校と兵士

ベルテヴは日本人将校の士気の高さと優秀さに称賛を惜しまないが、特に注目したのが兵士との関係である。部下である兵士を見下さず、いつくしむ心、兵士もまたそうした上官を慕っている様を繰

り返し述べている。

「直接満洲戦線にいた約1年の間、一人の将校でも兵士を罵倒し蔑んだのを見たことはなかった」(a-85) と。彼によればこれもまた儒教の影響によるものである。

[孔子は] 常に目上の者を尊敬し従うこと、目上の者も目下の者をいつくしむことをすすめている。[中略] 将校も彼らを自分の兄弟、息子であるかのように、きわめて親しく接している。決して見下したりはしない。(a-82)

日本の将校は軍規上、上官としての立場は守るが、将校と兵士の関係は親しみのある家族のようである。このように将校と兵士との間には他の軍隊とは似ても似つかぬたくいまれな調和が見られ、比類なき指揮の統一性があった。[中略] 日本の将校は、戦時においては至る所で兵士と行動を共にし、寝食を共にする。将校は戦闘で自分の部隊を指揮する際、命知らずの果敢な行動をし、自分自身を決して顧みず、最も危険なことにまず自分から飛び込む。[中略] 先の戦いで日本人を勝たせた理由の最も重要なものの一つは、日本人将校のこの高い志気とこうしたことに伴う優秀さであった。(a-83-84)

ベルテヴは将校と兵士という上下関係と共に、将校間の人間関係にも注目する。

軍隊の質の高さは軍隊を形成する将校が私利私欲、保身、競争を忘れ、一つの神聖な理想に一致団結して邁進することによる。この団結は確固たる「連帯」によってのみ可能となる。日露戦争においては、司令官と将校の間に保身、競争といったようなものは全く見られなかった。[中略] 二人の司令官が、たとえば一人が頭脳と指導力で他より劣るのに大きな成功をおさめたのに対し、他者はより優秀であるにもかかわらず、こうした成功をおさめられなかったとしても、この後者の司令官は前者を決して妬まない。逆に彼と満足感を共有する。目的は敵を倒し駆逐することであって、どの司令官の手柄であるかは重要ではない。なぜなら日本人の司令官、将校は常に目立とうとすることを知らない。個人の榮譽を追い求めない。自己を忘れ一体となり、ただ祖国の安寧と軍の勝利を考える。これを基本として励むのである。旅順で203高地とその周辺を占領が長い間遅れている時、遼陽の北にある煙台の日本軍参謀本部から、参謀総長元帥「児玉男爵」が作戦遂行において必要とあれば乃木大将に協力するよう旅順へ派遣された。たしかに203高地の占領はたまたま児玉の到着後成功した。このため、乃木大将はある程度気分を害するはずのところ、彼はこうした小心さを毛ほども見せなかった。逆にかつての学友、戦友である児玉を自分の部屋に迎えた。この訪問をまったくの喜びと満足とで迎えた。この当時、私は2度総司令部に本人たちを訪ねたが、二人は向かい合って座り、たいそう親しげにお茶を飲んでいった。この状況は全軍人、司令官達にとって模範となろう。心にとどめ置くべき非常に豊かな輝かしい道徳の手本である。賞賛に値するこの偉大さは日本軍において数えあげればきりが無い。(a-118-120)

ベルテヴはここで祖国に思いをはせる。「先のロシアとオスマン帝国との戦で、またさらに以前の戦争の多くで、司令官達の間にはるかスルタン・ムラト [1世] の時代 [1362-89] に、ララ・シャーヒン・パシャがハジ・エイル・ベイを妬んで毒殺したのを皮切りに続いた恐るべき競争、そしてこの

ために国家が被った耐え難い災いを想起すると血涙を禁じ得ない」(a-120)と。トルコの軍事史研究者ユルドゥズも、オスマン軍の将校と兵士との間には深い断絶があったこと、将校・士官階層の権力闘争が最大の問題点であり、司令官の無能が敗戦を招いたと指摘している⁽⁹⁾。

(3) 「武士道」

ベルテヴは日本の軍人におけるエトス、「名誉」・「忠誠」といったものを「武士道」の精神から説明しようとした。それでは、その土台となる「武士道」を彼はどのように理解していたのだろうか。新渡戸稲造の『武士道』は当時すでにドイツ語に翻訳され軍人たちの間で読まれていた⁽¹⁰⁾。ドイツに留学しゴルツの薫陶を受けたベルテヴがこの本を知っていた可能性は高い。ベルテヴは「武士道」とは何かについて以下のように説明する。

今から800年前「ヨリトモ」の時代に封建制が確立し、天皇は単なる精神的君主となり、そのかわりに実権を握ったのが「ショウグン」である。それ以後日本では「ダイミョウ」といわれる封建領主と「サムライ」といわれる武士とが政権を担ってきた。国家の「軍事集団」を形成する彼らの間で、次第に名誉に関するいくつかの取り決めが認められるようになったが、これに「戦士の道」を意味する「ブシドウ」の名が与えられた。武士道は成文法ではないにもかかわらず、まさにある宗教や法律がある民族の上に影響を与えるように、すべての日本の軍事集団の生活の上に大きな影響を及ぼしていた。特に16世紀末の有名な将軍「イエヤス」以来、現在の天皇に政権が渡るまでの長い平和の時代に、「武士道」の権威はすみずみまで行きわたり、すべての日本国民の道徳に絶大な影響を及ぼしていた。武士道について長々と説明する時間はない。端的に言えば、武士道とは男らしさ [merdlik], 献身 [fedâkârlık], 勇敢さ [kahramanlık] の名にふさわしいあらゆる美德をすべて集めた勇気の結晶、ヒロイズムの論理である。武士道が命じる義務の最も重要なものは二つある。一つはそばに仕える主君のために必要とあればよるこんで命を捧げること。もう一つは命知らずである。(a-99-101)

将軍の時代が終わり、今日の「ムツヒト」天皇の東京遷都以来、日本では封建時代が終わり、「ダイミョウ」と「サムライ」階級は公式に廃止されたが、武士道の権威は以前よりも厳格に尊重され、民はかつて自らの領主、主君に示した服従と献身をすべて国家の唯一絶対の主である天皇に対して示し始めた。欧米の文明の進歩を日本に持ち込んだこの新時代と共に、徴兵制もしかれ、武士道の掟が国民に与えたすばらしい美德を外に向かって発揮する方法を確立し、かつての単なる限られた藩の中での限られた土地と共同体 [ocak] に対する愛に代わって、日本国のすみずみまで愛国心が植えつけられたのである。(a-103-104)

以上のベルテヴの説明はおおむね当を得たものであり、彼が『武士道』を読んでいたことを裏付けるものである。彼は共和国期の著作『実力』においても武士道を次のように解釈し、同時に「サムライ」についても語っている。

「ダイミョウ（領主）」と「サムライ（騎士）」の間には次第に名誉 [şeref ve namus] にもとづ

く掟が受け入れられ実行され始めた。これを「ブシドウ（戦士の道 *muharibin yolu*）」という。[原注1：ブシ＝戦う者 [*muharib*]，戦人] (c-8)

武士道はサムライに正直さ [*ciddiyet*] と誠実さ [*isitikamet*] すなわち、すべてのことがらに健全さ [*sağlamlık*] と正しさ [*doğruluk*] を求めた。欺瞞，嘘つき，不信，ほのめかしといった性格の欠点は大いなる不名誉とされた。一人のサムライの約束はきわめて神聖なものとされたので，あらためて書面で約束するのは不名誉なことだった [原注1：かつてトルコ人もそうだった]。ブシつまりサムライは最も幼いころから勇気，あらゆる苦難に耐えること，困窮・疲労に慣らされる。幼少期に乳母は祖先の成し遂げた偉業を語ってきかせる。サムライはまだきわめて幼い時から恐れを知らぬことを証明するため，夜間恐ろしい場所，墓地などに行かねばならない [原注2：古いサムライの家柄の旅順港の英雄乃木大将は，まだ10才の時に，夜の暗闇の中をたった一人で処刑場へ行き，そこで処刑された罪人の首を持ってこさせられた]。平時サムライは武勇をきたえるため，あらゆる武術にたずさわった。戦場で息絶えることが彼らにとって幸せであり，最も大いなる名誉とされた。サムライは喜怒哀楽を表に出さないことを義務付けられた。なぜなら，これは彼に求められる完全な自制という長所に合わないから。涙を流すことも恥ずかしいこととされた。[中略]

サムライはハラキリによって汚名をすすぐことができた。恐るべき自殺である。ハラキリにあたり，サムライは最小限の動揺すら見せず，最大限冷静であらねばならなかった。[中略] サムライは常に公正でなければならず，武器は正義を守るために用いなければならなかった。サムライの最も大きなつとめは，自らの主君に忠誠であること，彼のためにいつ何時でも命を捧げる用意があることだった。(c-8-10)

ベルテヴは「武士道」が現在の日本人にとってどのような意味を持つのかを考察する。武士道の掟は武士階層に限らずすべての日本人に広まったので，日本国民の道徳性は至上のものとなった。このことが日本がきわめて短期間に文明諸国の仲間入りを果たす大きな要因となったという。明治維新によって封建制の政治形態は廃止されたが，封建時代に民に根付いていた精神的特性も共に失われたわけではない。それどころか旧体制が崩壊しても，「武士道」の精神は残された。これこそ日本人の精神の根幹を成すものであり，それは名誉，勇気，自己犠牲，尊厳と自尊心の文化である⁽¹¹⁾。この自尊心が西洋文明を受容する際，西洋人に見下されることをよしとせず，短期間で成功したカギであるという⁽¹²⁾。

ベルテヴによれば，日本では特に近年，かつてのサムライ時代の「武士道」が命じる精神的美德に再び顕著な重要性が与えられ始めている。「今日なお軍人たちはかつて彼らに比類なき勝利をもたらしたこれらの資質に特徴づけられる。それは忠誠，勇気，愛国心，服従，温厚さ，立派な道徳，名誉，質素儉約，自制，責任感，正直，常に冷静であることである。」(c-85) このように，「武士道」精神は今なお日本人の生活に深く根を下ろしてるといっているのである。

日本人における「名誉」と「忠誠」についても、ベルテヴは武士道に結びつける。戦場で死ぬことを「名誉」とする日本軍人の心性について彼は繰り返し語っている。

旅順〔攻撃〕を前に一人の少将は、「名誉の戦死のため次の戦場で死ぬことを望む。こうして名を残せば、何世代にもわたり、我が子孫はこの名誉を守るべく生きざるをえず、名誉を汚すあらゆる行為を控える。こうして祖国に大いに尽くす人材を育てるのである」と言った。(a-83)

君主への祖国への日本民族への、この一丸となった愛と絆とによって、日本人は必要な時そのために命を捧げるのを当然と考える。そして決して命を惜しまない。命は日本人にとっても大切なものである。しかし、命よりももっと大切なものがあれば、その時はそのために命を捨てることを日本人は神聖な使命とする。これは、君主や祖国や民族への愛と共に、もう一つは名誉の問題である。日本人において何世紀にもわたって行われている「ハラキリ」の習慣も名誉を守るためである。(a-96-98)

サムライにとって人生で最も価値のあるものは「名誉」だった。サムライは「名誉」のためなら命を惜しまない。なぜなら名誉を汚されることはサムライがサムライとして生きることができないということであり、その名誉はハラキリによってのみ回復することができるからである。(c-11)

ベルテヴは日本の軍人が捕虜になるよりも死を選ぶことについて、「日本人にとって敵に降伏すること、捕虜になることは名誉を傷つける所業である」(a-98) からだと解釈する。

日本人の「名誉・忠誠」至上主義がハラキリや戦場での自決を生むのだと彼は考えた⁽¹³⁾。同じ文脈で明治天皇の「軍人勅諭」を紹介し、そこで名誉や君主、上官への忠誠が強調されているとしている⁽¹⁴⁾。

(4) 精神論と教育の重視

ベルテヴには精神力というものを過信する傾向が見られる。「私の頭の中には常にドイツ人フィヒテの詩『勝利は軍備、武力によってではなく、精神力によって得るものだ』があった。この戦争の開始以来、すべての日本人の勝利を、この言葉が含意する偉大なる真理の教訓に私はなぞらえてきた」(b-18) という。彼は、「[日本がロシアを破っているのは] 戦いにおいて真に勝利を確定するものは『モラル』すなわち精神力である。しかるに、我々ヨーロッパ人は残念ながらこの力を重視しなくなってきている」(b-103) と嘆く恩師ゴルツの手紙を引用する。第二次大戦中の『実力』でも、アングロ・サクソンが日本に勝つには精神力に頼り、日本人のようによろこんで死地に赴くべきであるとし、「真のサムライ愛で戦場で死ぬことに魂を捧げる民族を打ち破ることは困難」(c-104) であると断言している。

「日本人の実力とは、物質的力よりも精神的資質・美徳にある。」(c-108) とするベルテヴは、「美徳の中でも最も重要なものは道徳と精神力である。道徳と精神力が完璧ならば、高貴な血を受け継ぐトルコ民族は、アッラー以外恐れるものなく、必要とあればあらゆる危機を乗り越えられる。」

(c-117) との結論に至るのである。ペルテヴの精神論は教育の重視につながっていく。

ペルテヴによれば、精神の動揺を防ぐには道徳の確立が不可欠であり、日本人はこのことを確信するがゆえに民族の道徳を守ることを何よりも重視している⁽¹⁵⁾。「道徳は民族の基盤である。そして知恵と才能はよき道徳あってこそ」(c-79) 活かされる。そして、国民教育のおかげで、民族精神、愛国心が生まれ、強化されるのだという⁽¹⁶⁾。

日本の学校教育で体育はすべて祖国を守るという観点で行われており、軍人が教官となる。重要な軍事式典に生徒たちを招き、その意義を教える。重要な史跡、古戦場を見学させる。こうして「先人たちの偉業を思い起こさせ、子供たちの祖国への思いを常に覚醒させておく。」(c-81) この結果、「日本の子供たちの心は祖国愛と献身の感情にあふれ、身体壮健な、おそるべき『武装せる国民 [millet-i müsliha]』⁽¹⁷⁾ を形成する」(a-130-132, c-81) のである。

同時に、日本の子供たちは「武士道」の掟により厳しい精神修養をつまされる。

日本の最も偉大な軍人であり、旅順港の英雄男爵乃木大将は、今日東京で上流の子女の教育のための高等学校の校長である⁽¹⁸⁾。目的は乃木大将のようなすぐれた勇敢な人物の監督下で、祖国に高邁な思想を持った母たちを育てることである。この母たちによって献身的な愛国心の有る息子たちが生み出されるのである。(a-125-128)

ペルテヴは、こうした日本の教育のあり方を範とし、「われわれも日本人のように子供たちに『愛国心』と『軍人魂』を初等学校から教え続け、君主、国家、民族のために命を捧げるよう育てるならば、オスマン軍は神以外この世に恐れるものはなくなる」(a-133) とさえ述べている。

(5) ペルテヴと日本

本のタイトル中に「教訓」とあるように、ペルテヴが日本人を観察する時、そして日本人を語る時、常に念頭にあるのは、祖国オスマン帝国の状況との比較、そして模範とすべき点はどこかという問題意識である。「我々オスマン人もかつて真の武装せる国民を作り上げ、精神的・物質的に強力な軍隊を有していた時代は最も強大であった。後に長い衰退の時期を迎えた最大の理由は、あらゆる意味で『規律正しい軍隊 [muntazam ordu]』の名にふさわしい軍隊を失ったためである」(a-132) との言からもわかるように、当時のオスマン帝国軍に求められたもの、それは司令官・将校の有能さ、そして、徴兵制によって兵士となる市民（国民）に軍人としてのエトスを与えること、であった。

ペルテヴの著作では、愛国心、自己犠牲、名誉、忠誠、責任感が繰り返し語られる。これらの大切さ、貴さをイスラームの教えにかなうと言えはわかりやすいのだが、残念ながら日本人はムスリムではない。日本人の場合、しかし、ペルテヴの理解するところ、それは「武士道」・「儒教道徳」に置き換えることができ、「武士道」の精神は根本においてイスラームの信仰が求めるものと何ら変わりはない。したがって日本人がイスラーム化する可能性すらあると言う。

日本人は魂の存在と永遠を信じている。イスラームも魂の存在と来世を信ずることが基本である。日本人にとって何世紀にもわたる戦いへのあこがれは民族的伝統である。イスラームでも、

[中略]「ジハード」は義務である。(c-106)

日本人は勝ち取ったもの、すべての名誉は天皇に捧げる。個人に何ら価値を見出さない。ムスリムもまた、すべての行為をアッラーの命によるものと信じるがゆえに自己顕示欲がない。(c-106-107)

日本人の道徳律の多くは真のイスラームの信仰が人間性にもたらす道徳律と同じものである。日本人はきわめて清潔で健全な民族である。イスラームの信仰も何よりもまず「魂の清らかさ同様身体の清潔と健やかさを命じている。」他にも多くの共通点があるので、日本人は無意識にイスラームの戒律に従っているかに見える。ゆえに「日本人にとってイスラームは決してよそのもの[yabancı]ではない。[日本人は]イスラームをいつの日か公式に受け入れるならば、これまでの様々な神と祖先の魂のかわりに我らがアッラーと呼ぶ唯一神に出会う。そうなれば向かうところ敵無しである。(c-106)

ベルテヴは『実力』の中で「日本民族がいつの日かイスラームに改宗すれば、精神的に一部は物質的にたやすくアジアの覇者となりうる」(c-106)ともいう。彼の思想の中には常に「キリスト教」対「イスラーム」、「西欧」対「非西欧もしくはアジア」の二項対立が看守される。オスマン軍人あるいは一人のオスマン人として、彼の中にも同時代の他のオスマン・エリートたちと同様、西欧の先進性とアジアの後進性の自覚、学ぶべき西欧へのコンプレックスが存在したことは確かである。『回想』において、イスタンブルから日本へ向かう船中での彼の体験、感想がそれを如実に物語る。

[イズミル港に停泊中の]アメリカの2隻の装甲艦の生き生きとしたさまを、わが軍艦の惨憺たる状況と比べると、まことに心痛に堪えず、[中略]涙をこらえきれなかった。(b-19)

かつてヤヴズ・スルタン・セリムが高き熱意で征服した大いなる「エジプト」が、今や我々の弱体、衰退、無関心と野放図のゆえに、なんとあっけなくイギリス人の手に落ちたことかと思うにつけ、またもきわめて遺憾であった。おのずから、さめざめと泣いた。(b-29)

[ポートサイドから横浜へ、北ドイツ・ロイドの汽船ザクセン号に乗り合わせた2人の日本人は]誰とも口をきかず、たえず日本語で何か書いている。この民族を羨まざるを得ない。我々トルコ人も、いつになったら世界に、特にヨーロッパ人、そしてかのモスクワ[ロシア]人に対して、存在を知らしめ、威厳を保ち、誇らしく頭をあげて歩けるのだろうか。東洋、イスラーム、トルコ世界、そして我がオスマン帝国の繁栄と安寧を見ることが、我が人生の最大の望み。ああ、いつの日かこれが見られるだろうか。[中略][ドイツ船同士がすれ違いざま国歌を演奏しあう様に]なんと幸せな国民たち！ いまだに国歌すらない我らあわれなトルコ人。そしてオスマン人は何とみじめで、ちっぽけであることか。(b-36)

[ポートサイドで]ホテルの前を大型船が往来する。これらすべては外国船である。[中略]残念ながらムスリム船籍は一隻もない。あわれなムスリムたちは皆価値のない、重要性のないささいな仕事に携わっている。エジプトは私に強い印象を与えた。東洋とイスラームの民がかくも落ちぶれているのを見て、この上もなく心が重かった。イスラームの信仰とムスリムの民が向上す

ることができるだけの努力をしようと自分に誓った。(b-32)

[船内のディナーで皿に万国旗の飾り付けがされていたがオスマン旗が無かったのを悲しみ船室に戻って泣いた。] 人は異国の地を巡っている時、故郷により結びつきを感じるものである。祖国と民族愛により燃える。そして自らの祖国、自らの民族が最上位にランクされることを望む。(b-48)

[シンガポールでジョホール・スルタンのサライ [宮殿] を訪れた。] 私はサライを見学中、あわれなイスラム諸国が—世界で最も自由で、最も文明的で、最もすばらしい信仰を持っているにもかかわらず—ただ無知、狂信、無関心、不道徳、公正と権利を尊ばず、相互不仲ゆえに、すべてこのように、外国人、キリスト教国の支配・植民地下に苦しんでいることに思いを致し、深い苦しみにひたった。心の中で泣き、目には涙が止まらなかった。(b-51)

わが信仰の、わが民族の、祖国の役に立つことができるようにと神に心から祈った。(b-84)

このように彼の愛国心、軍人のエトスには伝統的なジハード精神と近代的なナショナリズムの混交が見られ、それが西欧に対する複雑な思いとなって現れる。その延長線上に日本への関心、期待がある。西欧に学びながらも同化しない姿勢に引かれるのである。

「日本人は祖国を最も誇りとする民族である。いかなる階級の者であろうとも、たとえば、欧米に留学し祖国に帰った時、前以上に強い愛国心を持った専門家となり、祖国と前以上の愛情をもって結ばれる。欧米からは単に自分に役立つものだけを取り入れ、文明の名の下にある多くの有害な不必要なものには目もくれない」(a-92) と。

また、特に共和国以後、彼は日本人がトルコ民族と同じ「トゥラン系」・「ウラル・アルタイ系」であることを強調する⁽¹⁹⁾。そして日本がアジアの先導者、模範であると信じて疑わない。「[エジプトで] ロシア人は啓典の民であり、日本人は多神教徒、不信心者であるにもかかわらず、[エジプト人は] だれもが日本人にのみシンパシーを感じ、ロシアが負けることをのぞんでいた」(b-29) という。ペルテヴは『教訓』を次のように結んでいる。

かくて日本政府は陸海軍を今や十分に戦闘準備させたと同時に、何よりも国民のこれまで私が述べてきた精神力のおかげで、ロシアのようなヨーロッパとアジアの最大と目される国家をあらゆるところで例外なく打ち破り、これによってイスタンブルがスルタン・メフメト 2 世に占領されて以来今日まで支配的であった過去の時代を私の考えでは終わらせ、世界史上新しい時代を打ち立てた。現在、そして未来がこれを証明するであろう。我々が生きているこのヒジュラ 14 世紀⁽²⁰⁾ は「アジアの世紀」であり、東洋民族の覚醒の視点から近々さらに多くの突発事件で世界を驚かすであろう。日本の勝利が中国における圧政、イランの熱狂、インド、エジプトの興奮におおいに影響を与えたように、それに関連して、我々の自由と立憲制の実現にも影響を与えた。日本人が今日その道徳と勇気によって征服者の道を進んでいるように、かつては我々オスマン人もまさしく道徳と勇気によって勝利に突き進んだのである。世界中を驚かせたのである。今や憲政のおかげで我々の前に開けた決断と実行の広野で進歩すること、愛する祖国を内外の危機から

救い出すことを望むならば、なによりもまず道徳と勇気に重点を置くべきである。道徳と精神の乱れた民族は、物質的進歩が最高に達しても滅亡はつねに目前にある。[中略]「極東」で生まれた太陽は、近々我々にも同じ輝きで生まれる。かた時も忘れることは出来ないであろうが、ある民族の向上は常に自分自身の力による！（a-137-139）

III. 結論

ナショナリズムとイスラーム、アイデンティティの問題を、自分自身の中で、さらに自らが指導的立場にあると自負する国家の中で、どのように位置づけるべきかは、オスマン帝国末期の政治家、軍人、知識人たちが、程度の差はあれひとしなみに背負っていた葛藤である。定説的な理解では、19世紀に立憲運動を起こした「新オスマン人」たちの思想、オスマン主義は、宗教の違いを超え、オスマン帝国という国家への帰属意識で国内の諸民族をひとつにまとめようとするものであった。すなわち「オスマン国民」の創造である。しかし、20世紀に入るとキリスト教徒が多数を占めるバルカン領土の大半を失い、アラブ・ナショナリズムの覚醒に見られる非トルコ系ムスリムの離反という現実を前に、「青年トルコ人」政府は国家統合のイデオロギーとしてトルコ民族主義を強く打ち出すようになる。最終的に多民族・多宗教国家オスマン帝国は崩壊し、トルコ民族の国民国家を標榜するトルコ共和国が出現した⁽²¹⁾。こうした歴史の流れの中で、エリート軍人として、共和国以後は政治家としてペルテヴの思想はどのように変化していったのだろうか。そしてそのことは彼の日本人観に何らかの影響を及ぼしたのか。

まず、ペルテヴは同時代の改革派エリートの多くがそうであったようにオスマン主義者なのかといえ、彼の言説でそれらしいものは殆ど見あたらない。『教訓』の中で彼はこう述べている。

今日、徴兵がムスリムにもキリスト教徒にもすべての国民に課されたことは、全オスマン人が新たにおおるべき「武装せる国民」を形成するであろうことを象徴する。この「武装せる国民」は現在〔平時〕においては市民兵士を教育し啓蒙すること、戦時には敵に対して勝利する任務に耐える強力な「オスマン軍」の基盤となるはずである。（a-132-133）

この発言は一見オスマン主義のようではあるが、その意図するところはむしろ徴兵制による国民皆兵を肯定するものと理解すべきであり、彼をオスマン主義者とみなす根拠たりえない。

それでは、ペルテヴはトルコ民族主義者かといえ、トルコ共和国以後の彼の言説からは明らかにそうした傾向が看取される。1943年に刊行された著作『トルコ民族の将来』⁽²²⁾の中で、彼は「トルコ民族には高貴な血が流れている。」「テュルク〔Türk, トルコ語で「トルコ人」の意〕の語源は『力』である」⁽²³⁾という。トルコ民族は世界で最も古い、もっとも文明的な民族の一つである。トルコ民族はフンやモンゴルと同じウラル・アルタイ系に属する。したがって過去の歴史的英雄たち、アッティラ、チンギス・ハン、ティムールは同族といえる⁽²⁴⁾。トルコ民族の英雄としてはメフメト2世⁽²⁵⁾、セリム1世⁽²⁶⁾がいる。トルコ人は科学、芸術、音楽、医学、建築等の世界でも、ファーラービー⁽²⁷⁾、イブン・シーナー、ウトリー、スイナン⁽²⁸⁾らを輩出した。日本人もウラル・アルタイ系で

ある⁽²⁹⁾。「我々の過去はどの民族よりも輝かしい。この輝ける過去の記憶を、常に生き生きと憶えていなければならない。[中略] 将来のためにそれらの記憶から力を得るべきである。[中略] ナームク・ケマルは、『我々は確かに世界の勇者であった。勇敢さにおいて随一であった』と言った。今もそうであり、そうあり続けたいと私は思う。」⁽³⁰⁾

こうした考え方は『実力』にも見られることから、彼がトルコ民族主義者であったことは否定できないだろう。アタテュルクの下、共和国建国にあたり、国民統合のイデオロギーとしてトルコ民族主義が掲げられた国家の国会議員にして軍の重鎮であったベルテヴであれば、建前としてこのような言説を述べることは至極当然のことである。

しかし、一方で 軍人、政治家である以前に一個の人間としてのベルテヴのエトスの本質はイスラームにあった。前章で紹介した著作を見る限り、彼の軍人としてのエトスはオスマン帝国期もトルコ共和国期もそれほど変わってはいない。唯一の違いはトルコ民族主義的色彩が濃くなった点であるが、これは前述のような政治的状況の変化によるものである。

ベルテヴは、イスラームの信仰に依拠する「名誉」と「忠誠」を尊ぶオスマンの伝統的軍事エトスを、近代的なエトスに読みかえ、再解釈するため、「武士道」を積極的に紹介したと考えられる。ここでもう一度「名誉・愛国・忠誠」の対象についてトルコと日本を比較してみよう。

トルコの場合、前近代のオスマン帝国ではイスラーム（信仰）＝神であったものが、近代オスマン帝国・トルコ共和国ではイスラームと並んでナショナリズムが強調されるようになる。日本では、封建時代の武士道（儒教精神）が明治維新後も継続し、むしろ軍人（サムライ）階層のみならず普通教育により全国民に拡大する。ベルテヴの理解では、「武士道」は天皇＝国家への忠誠を求めるものであり、天皇は日本人にとって神なのであるから、「武士道」は神への忠誠を絶対とすると言える。一方、世俗主義を国とするトルコ共和国では、もはや神と国家は同一たりえない。したがって軍人のエトスは「愛国心」であるべきだった。しかし、ベルテヴにとっては、個人の心の奥深く、中核の部分にイスラームがあり、「人は何のために死ぬるか」という軍人のエトスの根源に、なお「神」への服従が不動のものとして存在した。彼が「武士道」にかくも心ひかれた理由もそこにあったと言えよう。ムスリム・トルコ人の重層的アイデンティティの問題は、今日なおトルコ軍のみならずトルコ共和国民にとって明解な答えの出せない難題なのである。

本稿は科学研究費助成事業・基盤研究（B）・平成26～28年度「軍事史的観点からみた18～19世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究」（課題番号26284089）による研究成果の一部である。

註

- (1) 三橋富士男（1957）：「オスマン・トルコとイエニ・チエリ制」『千葉大学文理学部紀要（文化科学）』第2巻第2号、67頁。
- (2) エシュキンジ（eşkinçi）登録時に出された勅令（ferman）。(*Tarih-i Cevdet*, Cilt 1, s.266)
- (3) 18世紀初頭のスルタン・アフメト3世（在位1703-30）の時代。西欧文化の導入が始まり、上流階級の間

にロココ文化が流行した。

- (4) 社会的連帯精神。イブン・ハルドゥーンは『歴史序説』でこれを歴史の動因であるとした。
- (5) Berkes, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 1978, İstanbul, p.43.
- (6) 新井政美 1992、p.987, Findley 2005, p.159 参照。
- (7) ユルドゥズ 2017
- (8) 引用箇所の出典は () 内に示した。a、b、c は書名、数字は頁数。a は『教訓』、b は『回想』、c は『実力』をあらわす。
- (9) ユルドゥズ 2017
- (10) 『武士道』は 1900 年に出版された (Inazo Nitobe 1900, *Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought*. Philadelphia: The Leeds and Biddle Company)。ドイツでは 1901 年に最初の翻訳本が刊行されたとされるが、1903 年説もある。
- (11) c-25-26.
- (12) c-11, 12.
- (13) c-46.
- (14) c-82
- (15) a-125-128.
- (16) c-46.
- (17) ドイツ語の *Volk in Waffen* を意識した表現と思われる。
- (18) 学習院女子部をさすと思われる。乃木は 1907-1912 年学習院院長の職にあった。
- (19) c-6, 52, 87.
- (20) イスラム暦 (ヒジュラ暦) は西暦 622 年を元年とする太陰暦であるため、19 世紀末は 14 世紀にあたる。
- (21) 新オスマン人の立憲運動から青年トルコ人政権に至るまでのオスマン帝国史の流れ、トルコ民族主義については、新井 2001、2009、佐々木 2014 参照。
- (22) Demirhan, Pertev, *Türk Milletinin İstikbali*, İstanbul, 1943
- (23) Ibid, p.5.
- (24) Ibid.
- (25) Mehmet II (1432-81)。オスマン朝第 7 代スルタン。1453 年にコンスタンティノープルを征服した。
- (26) Selim I (1467-1520)。オスマン朝第 9 代スルタン。1517 年マムルーク朝を滅ぼし、エジプト、メッカ、メディーナを支配下に置いた。
- (27) al-Fārābī (870-950)。哲学者。アリストテレスの研究で知られる。
- (28) Mimar Sinan (1492?-1588)。オスマン帝国の建築家。代表作はスレイマニエ・モスク。
- (29) Demirhan, op.cit., pp.5-8.
- (30) Ibid, p.9.

参考文献

- Berkes, Niyazi 1978, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, İstanbul
- Cevdet Paşa 1892/3, *Tarih-i Cevdet* (2.ed.) Cilt 12, İstanbul, H.1309
- Dündar, A. Merthan 2012, "Pertev Demirhan ve Rus-Japon Harbinden Alınan Maddî ve Manevî Dersler Adlı Eseri Üzerine", Esenbel, S. and Küçükyağcı, E. (ed.), *Türkiye'de Japonya Çalışmaları Konferansı I*, Boğaziçi Üniversitesi Yayınları, İstanbul, pp.299-314
- Findley, C.V. 2005, *The Turks in World History*, Oxford University Press
- Pertev Paşa 1913, *Rus-Japon Harbinden alınan Maddî, Manevî Dersler ve Japonların Esbab-ı Muzafferiyetleri*, İstanbul
- Pertev Demirhan 1942 (2.ed.), *Japonların Asıl Kuvveti—Japonlar Niçin ve Nasıl Yükseldi*, İstanbul
- 1943, *Hayatımın Hatıraları, Rus-Japon Harbi 1904-1905*, İstanbul

——— 1943, *Türk Milletinin İstikbali*, İstanbul

Worringer, Renee 2014, *Ottomans Imagining Japan: East, Middle East, And Non-Western Modernity At The Turn of The Twentieth Century*, New York

新井政美 1977 「ナムク・ケマルをめぐる二、三の問題点」『史学雑誌』86 編4号, 45-61 頁

新井政美 1992 「ムスタファ・レシト・パシヤからメフメット・アーキフへ—「オスマン国民」概念の淵源と影響とに関する粗描—」『人文研究』44(12), 984-1000 頁

新井政美 2001 『トルコ近現代史』みすず書房 2001

新井政美 2009 『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社

佐々木紳 2014 『オスマン憲政への道』東京大学出版会

三橋富士男 1957 「オスマン・トルコとイエニ・チエリ制」『千葉大学文理学部紀要（文化科学）』第2 巻第2号, 55-72 頁

横井敏秀 2008 「あるトルコ軍人の日本論（1）—日露戦争観戦武官ベルテヴ・パシヤのみた日本—」『国際教養学部紀要』Vol.4, 165-174 頁

ユルドゥズ, ギュルテキン 2017 「ラスト・イエニチエリ：近代戦争期におけるオスマン / トルコの軍事的エトスの転換（1826-1927）」『早稲田大学高等研究所紀要』第9号